

連載 14 交錯する尾崎翠と谷崎潤一郎の映画評

尾崎翠と谷崎潤一郎。この個性を異にする二人が、同じ映画を見ていたらしいことは、今にしておもえば不思議な接点である。

尾崎翠は次のように書いた。

一九三〇年には（いま四月だけれど）頭のなかにそろそろ裸女映画のはきだめやエロ女優の塔ができようとしてゐる。グロリア・スワンソンが寝台に身を投げ、天井に向つてはね上げた脚から靴下を剥いだのは、ぢき一昨日のことだけれど（これが当時の尖端的なエロなのだ）もう古い昔の思ひがする。その昔から明後日にしか当たらない今日、ズロオスから噴きだした脚の並列を見すぎてはもうたくさんと言ひたい古代心も涌く。

（『映画漫想』（二）1930年）

尾崎翠が「はきだめ」「塔」「並列」の点景と片付けたグロリア・スワンソンの脚について、谷崎潤一郎は、じつとり、じつくり小説に書きこんでいる。

彼女の横^{ついで}に衝立があつて、その衝立の蔭から出てゐる白い柔らかいうね／＼したものを、召使は膝の上に乗せながら両手で研いてゐるのである。……白い柔らかいうね／＼したものは彼女の手の中で頻りに動く。蛇のやうに、鰻のやうに、体に波を打たせて動く。それは女のはだかの足なのだ。（略）あゝ、あの足、……あの脚には覚えが



映画『アナトール』における
グロリア・スワンソンの足



ビーブ・ダニエル

ある。……と、私は思ふ。あれはグロリア・スワンソンの足だ。（略）「ド・ミルは女の足を映すのが好きなんだな」と私は思ふ。私と趣味を同じうしてゐるド・ミルが一層好きになる

（谷崎潤一郎「アゼ・マリア」1923年）

ここで、谷崎が「ド・ミル」と呼んでいるのは、セシル・B・デミル (Cecil Blount DeMille, 1881 - 1959) 監督のこと。グロリア・スワンソン (Gloria Swanson, 1899 - 1983) は、デミル監督の『何故妻を換へる? Why Change Your Wife? (1920)』『アナトール The Affairs of Anatol (1921)』で、美脚を披露している。彼はデミル監督作品の中のグロリア・スワンソンを見つめては、脚あるいは足のフェティシズムという嗜好の共通性を確認したもののようだ。

谷崎「アゼ・マリア」で憧憬的となる女優のもう一人は、やはり、デミルの『何故妻を換へる?』『アナトール』に出演しているビーブ・ダニエル (Bebe Daniels, 1901 - 1971) である。彼女は奇跡のような「白」のイメージを体現する。「彼女の全身は雪のやうに白く透き徹つてゐる（略）衣裳も顔も手も足も凡べてが真つ白で、それを射徹す強い光線がスクリーンの面へ銀のやうに燃え上がるのだ（略）ビーブ・ダニエルの白い体は白日が降るやうに降つて来たのだ」と。

「アゼ・マリア」で、ほとんど聖なる存在のように語られていた銀幕上のビーブ・ダニエルは、「痴人の愛」にいたって、ヒロインのナオミが「ビーブ・ダニ

エル乙に気取ったところ」に似ている、(そのことは、主人公譲治が、ナオミと別れがたい理由のひとつである)とまで語られる。

一方『キネマ旬報』は、ビービー・ダニエルズと彼女を呼んで、そのおきんな面を讃えていた。ビービーの一連の主演作は「娘十八」と冠して『娘十八運動狂』『娘十八泳げや泳げ』『娘十八冒険時代』『娘十八爆発時代』『娘十八映画時代』『娘十八コーラス時代』『娘十八我儘時代』……と、続々封切られていたのである。スラップスティック、ナンセンス、コメ

ディ、そして活劇が、「娘十八」の呼び物だった。なかでも清水千代太は『娘十八映画時代』について、「「娘十八」喜劇中の秀逸である」「馬鹿々々しさを超越した面白さ」「ナンセンスを解する人々にとっては最上の娯楽を供するものの一つ」(『キネマ旬報』1928年10月11日)と絶賛しているのが注目される。

ちなみに辛口の尾崎翠「映画漫想」によれば「ビイブ」は「どっかその辺の女優」「一掴みの女たち」の一人であった。